

ガイドラインについての意見

日本福祉大学 渡辺顕一郎

発達をふまえたかかわり方

学童期は、物事に対する関心や探究心が高まり、仲間との関係を通して社会性を向上させる時期でもある。この発達時期には、物事に取り組み、作業を完成させる喜びなどを通して、有能感や自己肯定感を育むことが大切である。また、体を使って遊ぶことを好む時期でもあり、身体的な活動の機会を保障することも重要である。

思春期は、第二性徴に伴う身体的変化とともに親からの精神的自立が課題となる時期である。この発達時期には、自らの生き方を模索し始める中で様々な精神的葛藤を経験するが、それらを乗り越えることによって自我同一性を確立していくことが大切である。また、高等学校などの時期には、社会的自立を見据えて、子どもの主体的な生活設計や進路決定を助けるように支援することも重要である。

発達支援・活動の組み立て方

1. 放課後等デイサービスにおける基本的活動は、①自立した日常生活を営むために必要な訓練、②創作的活動、作業活動、③地域交流の機会の提供、④余暇の提供である。これらによって、健全かつ充実した放課後（または休暇）を保障するように努めること。
2. 活動のあり方については、子ども自身のニーズの把握に努め、最大限に尊重するとともに、発達の状態や保護者の意向なども考慮しつつ、上記の基本活動を複数組み合わせた個別支援計画を作成すること。
3. 将来の自立や地域生活を見据えた訓練等を行う場合には、子どもが通う学校等で行われている教育活動をふまえ、方針や役割分担等を共有できるように学校等との連携を図りながら支援を行うように努めること。
4. 創作的活動や作業活動については、子ども自身の興味や関心を尊重し、個々の能力に沿った活動を行うことができるように多様な文化的活動や運動等のメニューを用意するように努めること。
5. 地域交流の機会の提供については、障害があるがゆえに子どもの社会生活や行動の範囲が制限される場合があることを考慮し、他の社会福祉事業や地域住民との連携、ボランティアの活用なども視野に入れながら、子どもの社会経験の幅を広げるように努めること。
6. 放課後や長期休暇は、子どもにとって学校授業終了後（または休業期間）であることから、一定の休息時間を確保するとともに、子ども自身が楽しめる遊びなどの余暇活動

を提供するように努めること。

7. 上記の活動については、計画的に実施することを前提とするが、活動日の子どもの心身の状態や疲労度の把握に努め、必要に応じて柔軟に対応すること。

家族支援の基本的な考え方

1. 子育て・介護等の役割が、母親などの特定の養育者だけに集中しないように、障害児の子育てを社会的に支援すること。
2. 親が支えを得て子育てに取り組むことができ、子どもに向き合うゆとりと自信を回復することが、子どもの発達に対しても好ましい影響をもたらす。
3. 放課後等デイサービスは、学校と同様に子どもが通う場であり、親にとっても身近に感じられる地域資源であることから、支援者との日常的なかかわりを通して、子どもの発達などに関して気兼ねなく相談できる場としての機能を担うことが望ましい。
4. また、親に対して休息や社会的活動に従事する時間を保障するためにも、放課後児童クラブなどの一般施策と同様に欠くことのできない社会資源である。